

語りのつど語り手と聞き手と語りの場で構成されるもの（創り出されるもの）であると確信し、随所で、従来の昔話研究が聞き手を疎外してきたこと、語りの場の重要性を等閑に付してきたことに、研究者たちの注意を惹こうと努められている。従来の話型の確認・確定研究の必要性を認めつつも、話者は聞き手と語りの場の要請に応じて、語り加え語り変えなど話に様々な工夫をこらすことに注意を喚起されている。話者が話に工夫をこらすことを、武田先生に見出された五四九話の語り手佐藤孝一氏は、^{書く}作を入れると云っているという。作を入れるという語を民俗語彙に、民話研究語彙に加えたい思いにかられる。

多くの話者たちと長年じかに接してこられた武田先生から、あるときたいへん興味深いことを伺った。婆さまが夜語りをするとき、子どもたちを座らせて、子どもたち一人一人にミカンをあげる、そのあともう一つミカンを子どもたちのうしろの暗闇に置く、隅っこでじつと話を聞いている夜ブスマへあげるミカンだ、とのこと。語りの場には、語り手聞き手だけでなく、目には見えない何者かもあることを子どもたちに気づかせるミカン。夜ブスマを媒介として、語りの場は世界・宇宙をも包含することになる。民話研究の進展への貴重な指標となる夜ブスマへのミカンの提示、先生ありがとうございました。

民話の真髓を極めようと、生涯を民話に捧げられた修道者ののごとき方であった武田先生、ご冥福を心よりお祈りいたします。

（ながの・あきこ／東洋大学名誉教授）

追悼 V・M・ガツァーク博士を偲んで

齋藤 君子

ロシア科学アカデミー準会員であり、ロシア口承文芸学界を代表する学者のひとりとして長年にわたり活躍されたヴィクトル・M・ガツァーク博士が二〇一四年二月二〇日に亡くなられた。享年八〇歳だった。心からお悔やみの言葉を捧げる。先生は二〇〇六年に日本口承文芸学会の招きで来日され、当学会創設三〇周年を記念する国際会議「グローバリズムのなかの口承文芸」に出席され、「フォークロア遺産の継承とポストフォークロアの創造の諸形態」と題して講演された。

博士はモルドヴァ共和国の出身で、キシニョフ大学を卒業後、モスクワの世界文学研究所で学び、一九六〇年にモルドヴァとルーマニアの叙事詩の研究によって学位を取得している。その後、同研究所のフォークロア部門主任教授として指導に当たり、多くの研究者を育ててきた。わたしは世界文学研究所を訪ねた折に、若い研究者たちを熱心に指導されている氏の姿を何度か目している。先生が企画された国際フォーラムに出席した際には、翌日発表を控えている若手研究者たちを順次部屋に呼び、夜遅くまで助言されていた。



ガツァーク先生と伊豆の河津桜 2006年3月6日

ガツァーク博士はマルチメデア・テクノロジを駆使してフォークロア遺産をもっともいい形で未来の世代に手渡そうと努力されてきたことでも知られる。音楽フォークロアの録音方法にマルチチャンネル方式というのがあるが、これも氏が考案されたものである。複数のマイクを使ってパートごとに音を収録する方式である。『ソ連諸民族の叙事詩』シリーズを出版されたことも、ロシアの口承文芸学誌『生きているむかし』の復刊一号から編集委員として活躍されたことも、ロシア科学アカデミーのシベリア支部が監修する『シベリア・極東諸

民族のフォークロア』シリーズの編集に力を注がれたことも、すべてはフォークロア遺産を未来の世代に手渡すためだった。先生が残してくださった、これらの刊行物は今や人類の大きな宝物となっている。

ガツァーク先生はわたしに個人的

な思い出もたくさん残してくださった。一九九六年夏、わたしは先生のお誘いでペンザ州におけるフォークロア調査に参加させていただいた。先生は列車に乗り込んだわたしに、「列車内では貴重品はベッドの下に入れておくように」などと旅の心得を伝えてくださったり、道中、重い荷物を運ぶのに難儀しているわたしに手を貸してくださったりした。プイリーチカ（怪異譚）に興味を持っていただきたのために、話者たちから話を聞きだす手伝いをしてくださったのも、他でもない先生だった。

『生きているむかし』誌の二〇一四年二号に掲載されたロシア国立フォークロア・センターのドブロヴォーリスカヤ準博士による追悼文に、「彼は多くの仲間たちを時の権力の圧力から守り、人をおとしめる書類には一度たりとも署名しなかった」とある。「ヴィクトル・ミハイロヴィチは他人から悪く言われたことのない、稀有な人物である」という言葉はけっして社交辞令ではなく、氏の人柄を端的に表すものである。

ガツァーク先生、どうか安らかにお休みください。

（さいとう・きみこ／國學院大學）